あとがき

本書は、2009年９月に京都大学大学院法学研究科に提出した博士論文「フランスにおける家族政策の『黄金時代』(1938-58年)の分析―家族政策におけるヴィシー時代と戦後の連続性を中心に―」を大幅に加筆・修正したものである。修士論文の頃から数えると10年以上の歳月が経ち、その間に渡仏３回を含む。

本書の対象期間は1902年から1958年までであるが、比較の観点から現在の家族政策も紹介したため、かなりの長期間を扱うこととなった。日本では家族政策より「少子化対策」の方が通りがよいかもしれないが、家族政策を使用する理由は本文中に記した。筆者がこのテーマに関心をもったのは、1930年代のフランスが現代日本とよく似た「少子高齢化」社会であった事実による。現在の「高出生率国フランス」とのギャップに興味を引かれた。また、フランス史の中で特殊とされるヴィシー時代に出生率が上昇した事実に関して、フランスでは家族政策研究者までが「黙して語らず」という態度であることにも興味を引かれた。100年以上の歴史がある家族政策の前半の詳細な歴史研究は、日本に限らずフランスにおいてもほとんど存在しないことを知り、「ならば自分で」という意気込みで研究を進めてきた。当初は日本語の先行研究は非常に少なく、政治学や社会保障に限らず社会学や文化史、ジェンダーなどさまざまな方面の文献に当たり、関連するものを拾い集め、原語を探し、仏語文献に当たった。日本語の訳語が定まっておらず、これとこれは同じものを指すのかどうか度々悩んだことも、今となっては懐かしい思い出である。最初に志した、「フランスの家族政策の起源と発展の経緯について詳細に、かつ『連続性』という一つのテーマをもって、一次史料を使用した政治史研究として提示したい」という壮大な目標を、もとより完璧に達成できたとは思わないが、曲がりなりにも出版という形にできたのは、さまざまな方々の温かいご支援のおかげである。心よりお礼申し上げる。

指導教官である唐渡晃弘先生には、博士課程編入以来お世話になっている。学部卒から相当のタイムラグがあり、修士課程は別の大学院、研究テーマは政

治史の王道からかなり外れたもの、という異色づくしの筆者を快く受け入れてくださった。以来、一次史料の重要性や、論文の論理的展開と隙のない構成などを、脇の甘い筆者に叩きこんでくださった。また、社会学的な内容に流れがちな筆者の研究に対して、常に政治学の視点を失わないように注意していただき、毎回鋭いコメントをくださった。頑固な性格の割にすぐ落ち込む筆者は扱いづらいことも多かったと思うが、程よい距離感で、常に自主性を尊重し、博士論文完成まで静かに見守ってくださった。感謝している。

また、新川敏光先生と中西寛先生には博士論文の副査を務めていただき、貴重なコメントをいただいた。大家といわれる両先生に拙稿を読んでいただけたことは幸運であった。本書に生かせていることを願う。新川先生の比較福祉国家研究の視座には学ぶものが多く、中西先生には大学院の国際政治学のゼミでもお世話になった。博学な先生方のお話は聞くだけで為になった。

それから、博士課程編入の際、筆者の修士論文にコメントしてくだった大嶽秀夫先生と小野紀明先生にも感謝申し上げたい。今から思うと随分拙い内容だったが、思いがけず好意的な評価をいただいた。以来、研究における密かな心の拠り所として大切にしている。

上記の他にもさまざまな方に学恩を受けている。そのことに触れる前に、私事を述べることをお許し願いたい。筆者は、学部、大学院の修士課程、博士課程と全て異なる大学で学んだ。大阪大学法学部に在籍していた頃、政治学に関心はあったが、研究者になることは考えていなかった。大学院入学のきっかけは、震災と介護である。兵庫県宝塚市に住んでいた時、阪神・淡路大震災が起こり、自宅が全壊した。幸い家族全員無事であったが、さっきまで自分が寝ていた場所にタンスや壁が崩れ落ちているのを見た時は呆然とした。多くの方が亡くなったことを思えば幸運な方であったが、それでもその後の２年間は「日常を奪われた生活」であった。今も東日本大震災の被災者の方々を思うと胸が痛む。あれは経験しないと分からない。こうした経験から、「生きているうちに好きなことをしよう」と思うようになり、フランス留学を実行した。この時、授業でフランス政治について学び、フランス政治への関心を高めた。帰国後はフランス語の語学学校に通い、「フランスの大学に入学できるレベル」の資格をとったが、その時の仕事にフランス語は一切必要なく、転職を考え始めた頃、

父が重度の脳梗塞で倒れた。一時は「覚悟してください」と言われるほどだったが、幸いリハビリ病院に転院するまでに回復し、退院後は自宅介護となった。母が進んで介護を引き受けてくれたが、１人では負担が大きいことは目に見えており、「時間がとれるから」という理由で仕事をやめ大学院進学を決意した。

こうした理由を秘めつつ、「留学中に芽生えたフランス政治への関心を研究で深めたい」と面接で述べた筆者を、関西大学大学院法学研究科の土倉莞爾先生は温かく迎え入れてくださった。あの時受け入れてくださらなければ、現在の筆者は存在しない。アカデミックな世界のことを何一つ知らずに飛び込んだ筆者に、土倉先生は初歩の初歩から研究のイロハを教えてくださり、修士論文完成まで導いてくださった。感謝したい。

また、奈良女子大学の渡辺和行先生にも大きな学恩を受けた。当時、関大に非常勤講師としていらしており、大学院の講義を通じてヴィシー時代への関心を拓いてくださった。渡辺先生のご著書『ナチ占領下のフランス』（講談社、1994年）が、本書の全ての始まりかもしれない。渡辺先生にはその他にも、毎回快く拙稿に対するコメントをくださり、歴史学としての史料の使いこなし方や史料選別の重要性なども教えていただき、非常勤講師の枠を遥かに超えてお世話になった。穏やかなお人柄と研究への真摯な態度、バランスの取れた叙述スタイルなど、筆者は大きな影響を受けたと思う。深く感謝申し上げる。

関西大学のその他の先生方にもお世話になった。森本哲郎先生、寺島俊穂先生、大津留（北川）智恵子先生、故・山本周次先生（大阪国際大学）は、大学院の講義等を通じて、研究者としての基礎が不足しがちであった筆者を根気よく指導してくださった。

学会や研究会報告においても、さまざまな方から有益なコメントをいただいた。特に立教大学の小川有美先生、首都大学東京の堀江孝司先生、筑波大学の近藤康史先生、一橋大学の田中拓道先生、龍谷大学の上垣豊先生、東洋大学の鈴木規子先生にはコメンテーターとして忌憚なきご意見を賜った。また、立命館大学の小堀眞裕先生には出版社をご紹介いただき、出版の道を開いてくださった。先生方のご高配に心よりお礼申し上げる。

また、三つの大学に所属したことは、人との交流という点で筆者にとって財産である。数多くの先輩、同輩、後輩の方々にお世話になった。全ての方のお

名前を挙げることは難しいが、京都大学では特に、梶原克彦、梶原（阿曽沼）春菜、近藤正基、西村邦行、辻由希、荒木隆人、塚田鉄也、安周永、阪本尚文の各氏にお世話になった。また、関西大学の脇坂徹、民法の岡田愛の両氏とは今も温かい交流が続いている。現在各方面でご活躍されているこれらの方々は、在学中筆者の研究にコメントを寄せてくださったり、自身の能力不足に悩み弱音を吐く筆者を時に温かく時に厳しく励ましてくださったりした。彼らの協力がなければ、博士論文及び本書は完成しなかったと思う。心から感謝申し上げる。その他、事情があり大学院を去った友人達にもお世話になった。感謝している。

本書の研究を進めるに当たり、2009－2010年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号21730115）と松下国際財団（現松下幸之助記念財団）（助成番号09-121）の支援を受けた。また、本書出版に当たり、平成26年度京都大学総長裁量経費として採択された法学研究科若手研究者出版助成事業による補助を受けた。関係各位に心よりお礼申し上げる。これらの経済支援がどれだけ助かったか知れない。

出版に際しては、法律文化社編集部の小西英央氏にお世話になった。初めての出版で不慣れな筆者を、刊行までフォローして導いてくださった。記して感謝したい。

最後に、本書を中国文学研究者であった亡き父・吉彦に捧げるとともに、長年静かに筆者を見守り続けてくれる母・明子と、普段から話し相手となり、今回校正作業も手伝ってくれた姉・都志子に感謝したい。家族の助けがなければ、研究を続けることはできなかった。亡き父も本書刊行を喜んでくれていることと思う。

2015年1月

福島　都茂子